「は」と「が」の機能

――相対化と絶対化――

坂野信彦

はじめに

助詞「は」と「が」の使い分けをめぐって、さまざまな論議が展開されてきている。その論点は多岐にわたっており、「は」と「が」の相違点がさまざまな観点からとらえられてきている。

しかしこれまでの諸説は、現象の多様な側面を個別に指摘するものであって、現象の全体を統一的に説明しうるものではなかったといわなければならない。

「は」と「が」の、それぞれの本質的な機能が、原理として認識されるならば、従来指摘されてきたもろもろの相違点も、統一的に理解できるようになるだろう。筆者は、「は」と「が」の助詞としての本質を原理的にとらえるべく、考察をおこなった。

その結果、現代語における「は」と「が」のちがいは、「相対化」および「絶対化」という単純な概念の採用によって、原理的、統一的に理解することができるのではないか、という結論に達した。すなわち、「は」と「が」は、それ

ぞれつぎのような対照的な性格をもつと考えられる。

は……相対化する助詞

が……絶対化する助詞

本論に入るまえに、本稿でキイワードとして用いる「相対（化）」および「絶対（化）」という語について、その意義の概略を記述しておこう。

「相対」とは、他のものとの関係において存立すること、である。「相対化」とは、他のものと比較し関連づけ、その比較・関連を通じて位置づけることである。相対化されることは、それゆえ他者にたいして相関的、対比的になることであり、みずからは対他的になることである。

これにたいして、「絶対」とは、他のものと無関係にそれ自体であること、である。「絶対化」とは、他のものから切り離して、それのみにひたすら関与することである。絶対化されることは、それゆえ他者にたいして拒絶的、排他的になることであり、みずからは即自的になることである。

本稿では、このようなごく常識的な意味において、「相対（化）」および「絶対(化)」という語を用いる。以下、助詞「は」と「が」の機能について、その本質と考えられる「相対化」と「絶対化」に焦点をあてて論じてみる。

一、「は」の機能

まず、「は」についてみてみよう。

〔先行部〕は〔後続部〕

という構文において、「は」はまず、先行部を相対化する。

相対化するということは、そのものじたいに執着しないということである。そのものをつきはなし、他者との関係のなかへ追いやる。先行部は、相対化されることで、言語主体の主観から解放され、それじたいとして客観的に存立することになる。かくて先行部（の指示する事物）は、その全体的な相において提示される。全体的な相ということは、すなわち一般的な相ということでもある。「は」は、先行部を一般化するのである。

相対化とひとくちにいっても、その実質にはさまざまな差異がある。じっさいに相対化がなされるには、あい対すべき他者の存在が前提となる。ところが、そのあい対すべき他者の存在は、かならずしもつねに明確であるとはかぎらない。そこで、先行部の相対化に質的な差異が生じてくる。

あい対する他者がはっきりしているばあいは、とうぜんながら、その他者との比較、対比ということが相対化の実質的内容となる。先行部は、この相対化によって、他の事物との相対的な関係においてとりあげられることになる。

あい対する事物がはっきりしないばあいは、ばくぜんとした相対化となる。特定の事物と対比するのではなく、他のもろもろの事物、つまり事物一般と対比するのである。事物一般と対比するというのは、事物の世界のなかで先行部の事物を特異的にとらえるということを意味する。いわば、世界を〈地〉とし、先行部を〈図〉としてうかびあがらせるのである。先行部は、この相対化によって、認識の対象として、客観的に現前することになる。

このように、おなじ相対化でも、他者の存在が明確であるか否かによって性質がちがってくる。これは、他者にたいする意識のありかたの問題と考えてもいいだろう。特定の他者をはっきり意識しているばあいの相対化は、明確である。他者一般をばくぜんとしか意識しないばあいの相対化は、ばくぜんとしている。前者の方が意識的であり、それだけ相対化の作用は強くはたらくといえるだろう。

ばくぜんとした相対化のほうからみてゆこう。

(1)　愛は永遠である。

「愛」に「は」がつくことで、「愛」は一般化される。しかもこの「愛」にあい対すべきものがとくに明らかでないので、この相対化は、ばくぜんと世の中の事物一般を対照群として設定することになる。こうして「愛は……」によって、世の中のもろもろの事物のなかから、特別に「愛」というものがとりあげられた、ということが示される。「愛というものについていえば、それは……」というのである。このようにして「は」は、先行部を対象化する。

(2)　私は田中です。

「私」に「は」がつくことで、「私」は話し手の主観から解きはなたれ、話し手個人をまるごとさすことになる。この「私」も、あい対すべきものは明確でないが、文全体から、人称のカテゴリーと無関係な対比は意味をもたないことがわかる。そこで「私は、……」は、人一般を対照群として背景に置くことになる。これによって、「私」という人物を他のひとびとと区別してとりあげることが示される。「私という個人についていうと、(私の名前は)……」というのである。

このような性格の先行部は、しばしば「主題」とか「題目」などとよばれている。「は」は提題の助詞というわけである。たしかに「愛は、……」の「愛」や「私は、……」の「私」は、それぞれの文の話題を示すものにはちがいない。しかし注意すべきことは、これらの文が「愛」や「私」をけっしてただ単純にとりあげているのではないということである。

「は」はむしろ、先行部それじたいを直接には問題としない。「は」は、相対化によって、先行部をいったんすべての脈絡や関心から解放し、ニュートラルな状態に置く。そうしておいて、その先行部にかんする何らかのコメントを、後続部に要求する。後続部の叙述は、つねに先行部の、ある特殊な一面にのみかかわるものであるほかはない。

したがって「は」は、先行部を一般化しつつも、同時に、それには特別にコメントを加えるべき一面のあることを示唆する。「は」は、先行部を一般化し、かつ、それを特異的にとりあげるのである。

この、特異的に、というところに、まさしく相対化の本領が発揮される。「は」は先行部を、他者との相対的な関係において、とりたてるのである。「は」のついた語句は、たとえばくぜんとではあっても、もはや他のものと無関係ではありえなくなるのである。

(3)　わたし、きれい？

(4)　わたしはきれい？

前者は、後者の省略形ではない。前者では、「わたし」はただ単純に提示されるだけである。しかし、後者では、「わたし」は「わたし」以外の人たちとけっして無関係ではありえない。「わたしは」は、「わたし」を他の人と区別して相対的に提示するのである。「は」を使うかぎり他者と無関係ではありえないから、他の人と無関係に表現したいと思えば、「わたし、きれい？」とか「わたしって、きれい？」と言うほかはない。

(5)　一たす一は二。

数式で書けばこれは「1＋1＝2」（一プラス一イコール二）となる。が、この「は」がそのまま「イコール」と同義ということにはなるまい。数式の直訳ならば、

一たす一は二に等しい。

とでも表わすべきであろう。日本語では通常、「等しい」とまでは言わないのである。「一たす一は二」の「は」は、先行部における数の組み合せを、他のさまざまな数の組合せと区別して対象化する。「ほかならぬ、一たす一という計算なら、いくつになるか、その答えは……」といった感じである。

さて、相対化にさいして設定される他者がより明確になると、たんに相対的にとりあげるというだけではなくなってくる。あるカテゴリーに属する他者との相対関係において、限定的に提示する、というふうになってくる。

(6)　日本は平和です。

「日本」は、「は」による相対化によって一般化され、いったん他の国ぐにと同一線上にならべられたうえで、他の国ぐにとの相対関係のなかで限定的にとりあげられる。「他の国についてはともかく、こと日本に関するかぎり……」といった感じである。

「は」による相対的限定は、とりわけつぎのような表現に明瞭にみとめられる。

(7)　いまはいえない。

(8)　ビールはある？

「いま」は、「は」によって相対化され、「あとでならまた別であるが、すくなくとも、いまという時点では……」といったぐあいに限定される。同様に、つぎの「ビール」も、「他のものでなくて、ビールにかぎって言うのだけれど……」といった限定つきで提示される。「ビールある？」と「ビールはある？」とのあいだには、かなりのへだたりがある。

しばしば、他の助詞のあとに「は」が付加される。これも、たいていは、相対化による限定をおこなうものである。

(9)　高見山には勝てない。

(10)　からだだけは大切に。

(11)　警察へは行くな。

「高見山に勝てない。」だと、勝負の相手として「高見山」だけしか念頭にない。ところがそこに「は」が介入すると、「高見山」以外の相手も視野のうちに入ってくる。「他の力士ならともかく、相手が高見山となるとどうも……」といった感じになる。ここでは「は」の役割は、先行部を助詞もろとも相対化し、対象を他者から区別して「高見山に」に（同様に、「からだだけ」「警察へ」に）限定することである。

このような相対的限定法にもすでに暗示されているが、他者を明確に意識すればするほど、相対化の機能はより強く明確に作用するようになる。逆にいえば、「は」の相対化が強められると、他者との対比が前面におしだされてくるようになるのである。

「は」の相対化が意識的に強化されるばあいには、しばしば発音上の強勢をともなう。[1]「は」を強調するということは、すなわち「は」のほんらいの機能をより強く発動させるということにほかならない。「は」を強調することは、すなわち相対化の作用を強化することである。

(12)　あの人はドイツ人です。

この文、「は」をふつうに発音すれば、「あの人にかぎっていうと、彼は……」といった意味になる。限定的提示である。ところがこの「は」を強く発音すると、「あの人」以外の人たちとの対比が前面におしだされてくる。そこでこの文は、「ほかの人たちはそうではないが、あの人は別で、彼は……」といったようなニュアンスになる。他者との比較、他者との相対関係そのものに、力点が置かれるようになるわけである。

(13)　あっちの水は辛いぞ、こっちの水は甘いぞ。

ここでは、「あっちの水」と「こっちの水」とが対比されている。たがいに他との相対性を強調しているわけである。このような対比・対照の作用は、「は」の相対化機能がもっとも端的にあらわれたもの、ということができよう。

以上のように、「は」は、つねに相対化という機能をつらぬきつつ、他者を意識する度合いに応じて、

相対的提示→相対的限定→対比

というふうに、助詞としてのはたらきかたを変えるのである（もちろん、このような段階じたい、相対的なものにすぎない）。

「は」の先行部承接のしかたは以上のごとくである。では「は」は、後続部をふくむ「〜は〜」という構文全体の組成に、どのように作用するのであろうか。

「は」は、格関係を指示するような特別な職能をもたない。それはただ、すべてを相対化するのみである。そのさい、「は」はまず、先行部をいったんつきはなし、一般化し、ニュートラルな状態に置く。このようにして放置された先行部が、後続部へストレートにつながってゆくはずはないだろう。先行部は、文脈の流れからはずされて遊離し、孤立してしまう。

その孤立した先行部にかんする何らかのコメントを、「は」は後続部に要求する。「は」は、先行部を一般化しつつも、それを意味ありげに提示するのである。「このものについては、他と区別して指摘することがある」というふうに、後続部によるコメントを誘いだすのである。後続部は、この誘いに応じたかたちで叙述される。だからそれは、つねに先行部と何らかのかたちで関連づけられる。

こうして先行部と後続部とは、「は」によって分け隔てられ、かつ関連しあうということになる。要するに「は」は、先行部の相対化を通じて、先行部と後続部の関係をも相対化するのである。

ここで注意すべきことは、「は」は、先行部と後続部の関係のしかたについては、何の指示も与えないということである。「は」はただ、両者を関連づけるだけであって、それ以上のいかなる介入もおこなわない。他の助詞を〝代行〟

するといった形式主義的な合理化は、このばあい、真実を正しく認識する妨げとしかならないだろう。「は」はただ、先行部と後続部を対置させ、両者を何らかの関係にあるものとして関連づけるだけなのである。

こうしてみると、「～は～」という構文は、図で示せば、つぎのような形になる。

先行部　ハ　後続部

先行部は先行部で独立したひとつの項をなし、したがって後続部も後続部で一項をなす。助詞「は」は、独立したふたつの項のあいだにあって、両者を対置させる。ここで対置された先行部と後続部の意味的な関係は、「は」によってではなく、主として先行部と後続部それじたいの相互関係によって、もたらされる。

(2)「私は田中です。」は、

私　ハ　田中です

というふうに、先行部である「私」と後続部である「田中です」とが、「は」を介して対置されるかたちになる。これはそれだけの文である。「私」と「田中です」との関係は、表現形式のうえにはあらわれていない。両者の関係は、主として両者のもつ情報の対照によって、もたらされる。すなわち、「私」という語が話者個人をさすこと、そして「田中」という語が人名であること、この両者の対照から、「私（の名前）は田中です」（あるいは、「私は田中（という名前の者）です」）という意味が生じてくる。

有名なウナギ文、

(14)　ぼくはウナギだ。

も、これとほぼ同様の構造をもつ文である。

ぼく　ハ　ウナギだ

先行部「ぼく」と後続部「ウナギだ」とが、「は」を介して対置される。ウナギ文はただそれだけの文である。「ぼく」と「ウナギだ」との関係は、両者の相互関係それじたい、および会話の場面によって、もたらされる。すなわち、「ぼく」が話者個人をさし、「ウナギ」が場の脈絡によって食べものをさすということから、「ぼく（の注文）はウナギだ」（あるいは、「ぼくはウナギ（を食べるの）だ」）という意味が生じてくるのである。「は」や「だ」によって他の語が代用されている、などと考える必要はどこにもない。

(15)　その本は読んだ。

という文も、やはり同様である。

$\boxed{\text{その本}}$ ハ $\boxed{\text{読んだ}}$

この文は、「その本」と「読んだ」とを対置するだけで、両者の意味的な関係については何も語っていない。意味は言語主体がつくりだすものであって、潜在的にせよ言語形式に内在するものである必要はない。「その本は読んだ」という文の背後に「その本を読んだ」ことが読みとれるとすれば、それは「本」という語と「読む」という語との「語彙論的」な相互関係に由来するのである。(2)

(16)　一時間かかる。

(17)　一時間はかかる。

(18)　一時間はかからない。

この三つの文を比べてみよう。「一時間かかる。」といえば、「かかる」のはそのものずばり「一時間」である。ところが、「一時間はかかる」といえば、「かかる」のは最低一時間、したがって一時間以上となる。なぜか。――まず、「は」によって「一時間」が相対化される（この文では、ぼくぜんと一時間くらい、一時間前後といったかたちにな

る)。さらに、「かかる」という肯定表現によって、一時間前後の「前」が消去され、「後」(以上)のみがとりざたされる。そこに、「すくなくとも一時間」といった意味が生じてくるのであろう。他方、「一時間はかからない。」というと、逆に、多くても一時間もかからない、という意味になり、「かかる」のは一時間未満ということになる。これは、「かからない」という否定表現によって、一時間前後の「後」が消去されて「前」(未満)のみがとりざたされるからであろう。

概していえば、「は」を介する先行部と後続部の意味的関係は、主として先行部と後続部そのものの相互関係によって、うみだされる。「は」が一定の指示をおこなわないということは、「は」の融通性、使用範囲の広さを示唆するものでもあろう。じっさい、「は」の使われかたは他の助詞にくらべて圧倒的に多様であるし、その多くはけっして単純に論理的な格関係に還元しうるようなものではない。たとえばつぎのような表現も、その多様さの一端を示すものといえよう。

(19)　東京は神田の生まれだ。

これは東京都千代田区神田の生まれということだが、「東京の神田の……」と言いかえてしまったら身もふたもない。「東京」に「は」をつけて文の流れを切り、ひとまず「東京」を(他の地域から区別して)まるごと提示する。そうしておいて、その全体としての「東京」の一部分として、「神田」という地区の名を出すのである。

二、「が」の機能

では、いっぽう、「が」のほうはどうであろうか。

「が」の機能は、「は」のそれとは対照的である。

〔先行部〕が〔後続部〕

という構文において、助詞「が」は、まず先行部を絶対化する。

「が」は、先行部を他者から隔絶させ、ひたすらそのもののみを問題にしようとする。そのものを表示することじたいが絶対的な意義をもつように、先行部を押したてるのである。

ところで、事物が絶対的な意義をもつというとき、とうぜんながらその事物は、ある特定の面から認識され評価されている。事物にはさまざまな面がある。そのある一面にのみスポットがあてられることによってはじめて、事物の絶対化が可能となるのである。

「が」は先行部を絶対化する。それは、先行部（の事物）を、ある限定された観点からとりあげることを意味する。この、ある限定された観点というのは、「〜が〜」という叙述じたいのもつべき観点である。すなわち、先行部は、叙述じたいの関与する範囲でのみ、問題にされるのである。叙述すべきことがらじたいが、先行部の内容を限定する。この点が、「が」の作用機序のもっとも重要なポイントであろう。

「が」は、先行部を他者から隔絶するばかりでなく、先行部それじたいの多面性をも捨象する。このようにして極限された先行部は、絶対的な意義をもって叙述の主体となる。

「が」による絶対化にも、差異がある。一般的には、先行部を他者と無関係に、そのものじたいの、ある一面だけが問題であるように扱う、というていどに絶対化する。

(1)　歯が痛い。

この文では、先行部の「歯」が絶対化され、「歯」だけが絶対的にとりあげられる。「歯」は、ここでは他のものと無関係である。あるいは、他のものを超越している。しかも「が」は、そのすべてに叙述全体が関与すべきものとし

て、先行部を立てる。先行部は、はじめから特殊化される。右の文の「歯」は、ただの歯ではなく、あくまで文全体がひたすら関与するところのそれである。つまりこの「歯」は、ほかならぬ「痛い」ところの歯なのである。

「歯が……」は、「歯、それもいま問題にするところの歯だけが問題なのだが、その歯が……」といった感じになろうか。いや、こうしたもったいぶった説明口調は、「が」にはまったく似合わない。先行部の表出それじたいが絶対的なので、「それだけについていうと……」とか「それだけが問題なのだが……」といった前置きの介入する余地は、実質的に存在しえない。「歯が」は、「歯が」としか言いようのない、直截な表現なのである。

(2)　どれがいい？

この文では、「どれ」が絶対化される。「どれ」というのは疑問詞だから、指示の対象は確定していない。しかしそれは、ある特定のものに確定すべきものとして、疑問のかたちで提示されている。「が」は、その確定すべき「あるもの」を、絶対化する。「どれが……」は、未定の「あるもの」に絶対的な格づけをおこないつつ、その「あるもの」に該当するものの選択を問うのである。

先の「歯が……」にくらべると、この「どれが……」のほうが、「が」の絶対化が強いように感じられよう。それは、「どれが……」というばあいには、他との差別が問題になってくるからである。おなじ絶対化でも、はじめから特定のもののみに関与するばあいよりも、他者との混在のなかから特定のものを指定するばあいのほうが、より大きなエネルギーを必要とすることはとうぜんであろう。後者のばあいに、「が」はその作用をより強く発動する。

(3)　玉子と牛乳がきらいだ。

「きらいな食べものある？」ときかれて、「玉子と牛乳がきらいだ。」と答える。「が」は、他者（さまざまな食べもの）との混在のなかから、「玉子と牛乳」だけをとりあげて絶対化する。「きらいな食べもの」という観点から、「玉子と

牛乳」のみが排他的に選別され、他のものはしりぞけられる。その結果、この文は、基本的には「きらいな食べものは玉子と牛乳だ」という意味になる。「きらいな食べもの」に該当するもののすべてを列挙しているわけである。

このような「～が」が、とくに「総記」とよばれることがある。[3] すべてをあげているのであるから、これはたしかに「総記」である。だが、「が」の異なった用法の一つとして「総記」なるものがある、といったら本質をみうしなってしまう。「が」のはたらきはつねに絶対化にある。ちがうところは、その絶対化が、他者を公然と（明示的に）排斥することになるか否か、という一点にすぎない。

ところで、「が」もまた、しばしば発音上の強勢によって、強調される。「が」が強調されると、「が」の機能である絶対化そのものが強調される。その結果、他者を拒絶して特殊にのみ執するという絶対化の本質が、前面に押しだされる。

(4)　水が飲みたい。

「が」をふつうに発音すれば、この文は、単純に「水」だけを問題にして「水が……」といっていることになる。ところが、「が」を強く発音すると、それにさらに「絶対に水でなければならない」という強調が加えられる。

――水が飲みたい。
――ジュースあるよ。
――水が飲みたいんだ。

弱声でも「水」は絶対化される。それが強声になると、他者の拒絶と自己への執着がいっそう強化されて、まさに「絶対」という格づけにおいてかかげられるのである。

さて、先行部を絶対的なものとしてとりあげた以上、その叙述は、先行部をあくまで絶対的にあつかわなければな

らない。すなわち、「が」につづく後続部は、先行部を主格として立て、それに全面的に関与するようなものでなければならない。いいかえれば、「が」は、先行部が主体となり、先行部と後続部とが主従一体となるように、機能するのである。「が」は、こうして先行部と後続部の結びつきをも絶対化するのである。

「が」は、先行部と後続部の双方をひきつけ、みずからに密着させる。「が」の絶対化作用は、格関係にあるものをひきつける〝引力〟を生じる。この〝引力〟が、叙述の全体をひとまとまりのものにする。

かくて「〜が〜」という構文は、その全体がひとつの項となる。ひとつの項はひとつのことがらを表現する。

（先行部）が（後続部）

(1)「歯が痛い。」という文では、主体となる「歯」と、それに全面的にかかわる後続部「痛い」とが、「が」によって間髪を入れずに結びつく。文全体がひとつの項として結束し、ひとつのことがらを表現する。

歯が痛い

「水が飲みたい。」という文においては、通常、いわゆる主語は表現されない「(私)」であって、「水」はむしろ「目的語」とみなされる。「が」は「目的語」をも主格に立てて主体となすわけである。というより、絶対化には「主語」や「目的語」の別は無用なのである。「が」は、何であれ先行部となるものを絶対化する。先行部の「水」が「主語」であろうと「目的語」であろうと、「が」はともかくそれを絶対化する。「水」は絶対化されることによって主格の座につく。後続部はその「水」に全面的にかかわって、主従一体となる。

水が飲みたい

「が」は、このように先行部をともかく絶対化するが、むろん、それがつねに「文法的」な句文の成立につながるとはかぎらない。

雷鳴が聞こえた。

と言えても、

雷鳴が聞いた。

とは通常言えない。叙述が「が」による先行部の絶対化に適応しうるか否かは、これもやはり、主として先行部と後続部の「語彙論的」な相互関係によって決まるのである。

三、「は」と「が」の対比（その一）

「は」と「が」は、そのはたらきがいちじるしく相違しているようにみえるばあいもあるが、また、ほとんどちがいがないようにみえるばあいもある。かずある助詞のなかで、「は」と「が」のみをとりあげて対比するのは、両者の相違点をことさら強調してしまう危険がある。そういう落し穴にはじゅうぶん注意したい。しかしそれでも、両者はその本質において、まさに対照的なのである。

「は」と「が」は、そのはたらきが、たがいに逆を向いている。「は」は、他者への志向性をもち、先行部を特殊から一般へみちびこうとする。たいして「が」は、逆に自己への志向性をもち、先行部を一般から特殊へみちびこうとする。

(1)　数学は三番だ。

(2)　数学が三番だ。

どちらも同じようなことを言っているようにみえる。が、前者は「数学」を対他的にとらえており、後者はそれを即自的にとらえている。「数学は」のほうは、「数学」という特殊を、そのカテゴリーである学科目一般へと関連させ

る。逆に、「数学が」のほうは、学科目一般から「数学」という特殊のみに、さらには「三番」であるところの「数学」のみに、焦点をしぼる。

かくて、「数学は三番だ。」は、他の学科目や他の順位と相関関係をもち、たとえば「文学は一番だ。」などに対応した表現となる。他方、「数学が三番だ。」では、もはや「数学」だけが問題であり、順位も「三番」だけしか問題とならないのである。けっきょく、「数学は……」は相対的表現、「数学が……」は絶対的表現、ということになる。

ところで、「数学は……」と「数学が……」とでは、「数学」や「三番」にたいする重点の置きかたが異なっているように感じられる。このことは、これらの文への導入部としてもっとも自然な前置きをつけてみれば、はっきりする。

数学は何番かというと、数学は三番だ。

何の科目が三番かといえば、数学が三番だ。

伝達の主眼がちがうのである。「数学は三番だ。」のばあいには、「三番」に主眼が置かれる。（これを「焦点」とよべば、これに対応して「数学」は「前提」ということになる）。また、「数学が三番だ。」のばあいには、むしろ「数学」に主眼が置かれる。

このような傾向についてはこれまでにも指摘されてきている。が、なぜそうなるかという理由はじゅうぶん説かれていなかった。本稿の立場からすれば、理由は明白である。これは、「は」と「が」の、先行部のあつかいかたのちがいに由来するのである。

「は」は先行部を相対的にあつかう。相対的にあつかうということは、そのもの（の表出）じたいに絶対的な意義があるようなとりあげかたをしないということである。「は」は、事物を相対的に提示することによって、問題を当の事物そのものから、それの相対的な特性のほうへと移行させるのである。「は」は問題をそらす、と言ってもよい。そ

のものじたいは問題とならないというものが、文の主眼となりにくいことは自明であろう。「〜は〜」の主眼は、おのずから後続部に置かれることになる。

いっぽう、「が」は先行部を絶対的にあつかう。絶対的にあつかうということは、そのもの（の表出）じたいに絶対的な意義があるようなとりあげかたをするということである。そのものじたいが問題となるようなもの、これはまさしく主眼となるべきものであろう。かくて「〜が〜」という句文では、先行部に主眼が置かれる。ただし、「が」は先行部と後続部を一体化するので、多くのばあい、後続部も先行部とともに〝主眼〟となる。「数学が……」の文も、つぎのような文脈では、「〜が〜」の全体が〝主眼〟ということになろう。

——成績どうだった？

——うん、数学が三番だ。

「は」の相対性と「が」の絶対性は、また、しばしば表現の消極性と積極性という対照となってあらわれてくる。

(3)　少しは、いい。

(4)　少しが、いい。

どちらも「少し」を「いい」と言っているが、その姿勢はいちじるしく相違している。前者は消極的に「いい」と言っており、後者は積極的に「いい」と言っている。この対照もやはり「は」と「が」の本質に由来する。ここでも「は」は、「少し」そのものを問題にせず、「少し」でないもの（たとえば「たくさん」）との相対的な関係においてそれに関与する。そこで、「少しというていどなら、まあ、いいだろう」といった意味が生じてくる。

これにたいして「が」は、「少し」でないものを排して、「いい」ところの「少し」そのものだけを問題にする。だから「少し」は、のっぴきならない地位に押しあげられ、これに後続の「いい」が結びつく。そこで、「少し」を積極的

に評価するニュアンスが生じてくる。

「は」と「が」は、先行部と後続部の関係づけのしかたにおいても対照的である。「は」は両者を分離し、対置させる。「が」は両者をひきつけ、一体化する。[4] 要するに、「は」は両者の関係を相対化し、「が」は両者の関係を絶対化するのである。

(5)　象は鼻が長い。

この文は、「は」によって、「象」と「鼻が長い」の二項に分離する。「鼻が長い」は、「が」によって一体化されるから、そのまま一項をなす。そこでこの文は、つぎのような構造となる。

象　ハ　鼻が長い

「象」は相対的にとりあげられて対象化され、「鼻が長い」という叙述と関連づけられる。象というものは、他の動物にくらべて、「鼻が長い」という特徴をもっている、といった意味になる。

「は」と「が」を入れかえると、文の構造も変化する。

(6)　象が鼻は長い。

まず、「が」が先行の「象」と後続の「鼻は長い」とを一体化するから、文全体がひとつの大きな項をなす。ついで、「は」が先行の「鼻」と後続の「長い」とを分離するから、「鼻は長い」はふたつの小さな項に分立する。

象が　鼻　ハ　長い

これはあまりすっきりしない図であるが、それというのも、そもそも構文じたいがすっきりしないからである。これはむしろ、「鼻は」をマスの外にだして、

鼻ハ象が長い

としたほうが、ニュアンスはちがってくるが、すっきりする。

さらに、

(7)　象は鼻は長い。

は、

象ハ鼻ハ長い

となり、

(8)　象が鼻が長い。

は、

象が鼻が長い

となる。それぞれの構造のちがいは、文意やニュアンスのちがいを反映するものでもある。

より総合的にみるならば、「は」は相対化による関係づけを本務とし、「が」は絶対化による自己同一化を本務とする、ということもできる。一般に、この関係づけは認識を形成し、この同一化はことがらを形成する。

「は」のばあいは、先行部を一般化して提示し、後続部はそれについて何らかの叙述をおこなう。後続部は先行部から相対的に独立しており、相関的にのみ先行部にかかわる。そこで後続部は、一般化した先行部についての何らかの認識を示すことになる。

「が」のばあいは、はじめから、ある特殊な観点から叙述する。先行部と後続部は一体となって、あるひとつのこ

とがらをあらわす。

(9)　雪はふる。

(10)　雪がふる。

両者とも、おなじ天然現象に接しての表現である。おなじようなことを述べているが、しかし両者は明らかに異質である。この二文のちがいは、まさしく「認識」と「ことがら」のちがいであろう。前者は、「雪」というものについて、その「ふる」という状態を認識している。後者は、「雪がふる」ということがらじたいを認識している。前者はその「認識」を表現したものであり、後者はその「ことがら」じたいを表現したものである。

このように、同じ事態について表現していても、そのとらえかたによって、「は」と「が」が使い分けられる。かつまたその使い分けによって、表現内容に「認識」と「ことがら」のちがいが生じてくるのである。このことは、つぎの二文における「は」と「が」の使い分けに、より端的にあらわれている。

(11)　地球は丸い。

(12)　地球が丸いことは知られている。

前者は、「地球」というものについて、その形状が「丸い」ことを認識している。たいして後者は、「地球が丸い」ということがらについて、そのことが「知られている」ことを認識している。

このように、「は」と「が」は、そのはたらきの性質を根本的に異にしている。それが、「は」を用いた文と「が」を用いた文との、さまざまな対照性となってあらわれてくるのである。

なお、「は」は他の多くの助詞と重ねて用いることができるが、「が」とは重ねられない。このこともまた、両者の対照性、というよりむしろ相反性に、由来するものと考えられる。

四、「は」と「が」の対比（その二）

「は」と「が」の相違点については、細かく指摘してゆけば、ほとんどきりがない。[5] 本稿は、「は」と「が」の相違を、その現象面において明確にしようというのではなく、その本質においてとらえようとするものである。それゆえ、ここで両者の相違点をさらに列挙して論じるにはおよぶまい。さいわい、「は」と「が」の使い分けをめぐる論議の主要な論点を、田中富夫氏が四項目に整理している。[6]

前節までの論述の繰り返しになってしまう部分もでてくるが、再確認の意味もこめて、以下これを一項目ずつとりあげて検討してみることにしよう。

a　「ハ」は既知の情報を提示し、「ガ」は未知の情報を提示する。

松下文法にすでにみられる説である。「は」のばあいは後続部に、「が」のばあいは先行部（および後続部）に、それぞれ伝達の主眼が置かれることからして、このことはとうぜん予想される。未知を既知たらしめることが、伝達のおもな目的であるからである。

(1)　私は田中です。

(2)　私が田中です。

(1)の文では、「田中」という人名の表出に主眼がある。その「田中」が未知で、「私」は既知である。(2)では逆に、「私」に主眼があり、その「私」が未知で、「田中」は既知である。既知・未知の対照は鮮明である。

だがむろん、この「既知／未知」説も、あくまで傾向を指摘するものにすぎない。

――全科目一番だろう？

――いや、数学は三番だ。

この「数学」は未知であろう。また、「は」の上に疑問詞はこないという指摘もあるが、けっしてそんなことはない。

(3) 大きなエレベーターなら、何人は乗れますか？

(4) 表紙に何色は使えますか？

(5) 誰と誰はダメですか？

いずれもごくありふれた日常表現で、何の不自然さもない。「が」のばあいも同様で、「が」の上に既知がこないわけではない。

(6) 三十八度五分？……早く熱が下がらないかなあ。

(7) この問題が解けないのか。

この「熱」や「この問題」は、発話にさいしてすでに前提とされていることである。

また、前節であげた例のように、従属節、名詞句においては、「は」に代えて「が」を用いるべきケースが多い。

地球は丸い→地球が丸いこと

こうしてみると、「既知／未知」説はまったく破綻してしまいそうである。しかし、多くのばあいに既知は「は」で受け、未知は「が」で受けるのが自然であるということもまた、たしかである。なぜそうなのか。その原理的根拠は、前節で言及した「主眼」（焦点）のばあいと同様である。

既知→そのもの（の表出）じたいには相対的な意義しかない→相対化すべし→「は」で受けるべし

未知→そのもの（の表出）じたいに絶対的な意義がある→絶対化すべし→「が」で受けるべし

ここには、「既知／未知」説が傾向を指摘するものにすぎないことも、原理的に暗示されている。問題は、そのものじたいに絶対的な意義があるか否か、なのである。既知であっても、そのものじたいに絶対的な意義があるときには、「が」で受ける。未知であっても、そのものじたいには相対的な意義しかないときには、「は」で受ける。

先にあげた例文の、「数学は三番だ。」では、「数学」という科目じたいを問題にしているのではなく、他の科目と「数学」との相対的な関係を問題にしている。また「何人は乗れますか？」でも、「何人」というはっきりした人数じたいを問題にしているのではない。「数学」や「何人」には相対的な意義しか与えられていない。よってこれらは、未知であっても「は」で受けるべきものなのである。他方、「早く熱が下がらないかなあ。」では、「熱」じたいを問題にしている。「熱」そのものに絶対的な意義が与えられる。よって既知であっても、これは「が」で受けるべきものなのである。

また、従属節は、それでひとつの統一体をなす。そこでは事物は、ある特殊な観点からとりあげられ、それじたいが絶対的な意義をもつことが多い。それゆえ従属節でも、既知の事物についてしばしば「が」が用いられることとなるわけである。

b　「ハ」は、文の主題・題目を提示し、それについての説明をあとに従えるのに対して、「ガ」は、単なる叙述の主体（主格）を示す。

「は」による提題、「が」による主体化。それぞれすでに述べたところのものである。

「は」は、先行部を相対化し、一般化する。先行部はつきはなされ、すべての文脈や関心から解放される。そのニュートラルな先行部を、「は」は後続部にたいして特異的なものとして提示する。特異的なものとして提示するということは、それにかんして何か特別に言及すべきことがあるはずだ、という含みをもたせることでもある。そこで、後

続部が先行部にかんして何らかのコメントをなすようなばあいには、その文はまさしく題述文ということになる。

(8)　学問の自由は、これを保障する。

主部で「学問の自由は」と言っておいて、述部であらためて「これを」と説き起こしている。主部はたんに題目を提示しているだけということが、いかにも如実にあらわれている。「は」は、先行部をそこにポンと投げだして示すだけなのである。

ただし、とうぜんのことであるが、後続部が説明のたぐいでないばあいには、その文は題述文とはならない。「外へは出るな。」とか「行くことは行く。」のようなばあいがそれである。

いっぽう、「が」は、先行部を絶対的なものとしてとりあげる。しかもその先行部と後続部とを一体化してしまう。こうなると、先行部は叙述の主体とならざるをえないし、後続部は先行部を主体とする叙述の一部とならざるをえない。絶対化の「が」によって題述文を構成することは、原理的に不可能なのである。

「は」が題述文をつくり、「が」が主述文をつくることは、両者の機能の本質の端的なあらわれといえよう。

c　眼前の事実の描写のように、現場的な叙述には「ガ」が用いられ、固定した観念の叙述など、非現場的なものを述べるときには「ハ」を用いる。

これも傾向を指摘するものである。

「は」は、先行部を相対化し、その内容を一般的な概念として提示する。一般的ということは抽象的ということでもある。それゆえ、「は」によって相対化された先行部は、概念のワクだけの空疎なものになりがちである。これは題目の提示や既成概念の指示にはふさわしくとも、事物の具体的な叙述にはふさわしくない。

「が」のほうは、先行部を特殊化し、それに後続部を絶対的に結びつける。これによって叙述の全体が、先行部を

主体として、ある特殊な観点から、あることがらを表現したものとなる。これは、事物の具体相の描写や突発的な出来事の表現に、もっともふさわしい。

(9)　桜は美しい。

(10)　桜が美しい。

「は」と「が」のちがいが、この二文をまったく異質なものにしている。前者は、（桜を現に眺めていると否とにかかわらず）桜という植物一般について、それが美しいものであるという認識を述べている。一般論として、桜のもつ普遍的な属性を述べているのである。ところが後者は、現に桜を眺めながら感受した、「桜が美しい」という実感を述べている。おなじ「桜」でも、前者のそれは概念としての桜一般であり、後者のそれは現前する特定の桜である。

「は」は、先行部をつきはなし、一般的、抽象的なものとしてあつかう。それが叙述を非現場的なものにする。「が」は、先行部を特殊なものとして、しかも即事象的に、あつかう。それが叙述を現場的、描写的にする。

d　接続関係などの場合を除き、一般に、「ガ」は従属節の中に収まりうるが、「ハ」は、従属節の中に収まらず、文の終わりまでかかって一定の言いおさめ（陳述）を要求することが多い。

これは、ワンピースタイプをつくる「が」と、セパレートタイプをつくる「は」のちがいであろう。

まず「が」のほうからみてみよう。「が」は、絶対化の機能によって先行部と後続部を一体化する。ここでは先行部と後続部は不可分の主従関係にあり、両者は相互依存的にひとつのまとまりをなす。先行部と後続部は、原理的にひとつながりのものなのであり、しかも両者はつねに一定の特殊な観点から統一されていなければならないのである。それゆえ、いったん叙述が途切れたり流れが変ったりすると、それ以上には先行部の格関係がおよびにくくなる。

(11)　長女が生まれると、すぐ死んだ。

この文、これだけだと不完全もしくは不自然に感じられる。それは、「すぐ死んだ」の主体が不明瞭だからである。「生まれると」で叙述の流れが停滞し、そこで「が」の支配力が衰滅してしまう。

ところがこの文の「が」を「は」にかえると、ごく自然で完全な文ができる。

(12)　長女は生まれると、すぐ死んだ。

「は」は、先行部と後続部とを相対的に独立した項として分立させる。先行部と後続部は、「は」によって分けへだてられ、間接的にのみかかわりあう。両者のあいだには断絶があり、しかも後続部は先行部から独立しているのである。となれば、叙述に少しばかりの途切れや転移があっても、後続部としての資格を保ちうることはとうぜんであろう。

長女　ハ　生まれると、すぐ死んだ

さらに、「は」は先行部を、それについて指摘すべきことがあるとして、おおまかに提示する。それをうけて、指摘すべきことを指摘するのが、後続部の役割である。とすれば、その「指摘すべきこと」の叙述が明確に完了するまでは、一貫して後続部でありつづける、というのが原則であろう。

かくて「は」は、「指摘すべきこと」の叙述が明確に完了するところまで、その「係り」を留保する。先行部が「主題」をあらわすばあいには、その「解説」はとうぜんながら文の末尾へいたる。こうして原理的にも、「は」の後続部は文末までつづくというかたちが、常態ということになる。（むろん、歴史的にみれば、これは「は」の係助詞としての出自の然らしめるところでもあるが）。

また、日本語は話し手の態度を文末で示すことが多い。しかも「は」のはたらきは、肯定か否定か、禁止か許容か、などによって微妙に変化する。そこで「は」は、しばしば文末の陳述と呼応して、その機能を果すことになる。「は」

が文末に一定の言いおさめを要求することが多いというのは、原理的には主としてこのような事情によるものと考えられる。

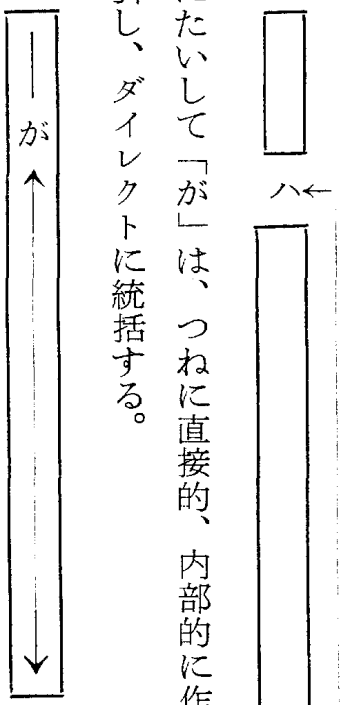
(13) 太郎は今春、高校を卒業して、大学へ進みました。

(13) 警察へは知らせるな。

(14) 東京は東だが、京都は西だ。

なお、「は」は文末までかかることが多いといっても、文末までかからないことはめずらしいというほどでもない。そこで、(14)の文の「だ」のように、後続部の終了を示すなんらかのしるしがあるほうがわかりやすい。「一定の言いおさめ」は、そのしるしの役目を果すものであろう。それは、「は」の「係り」を受ける叙述の、まさに「結び」を示すものである。

図式的に総括してみよう。「は」は、後続部にたいしてつねに間接的、外部的に作用する。「は」は、いわば外側からまわりこんで、後続部の末尾にかかるのである（後続部の末尾は、しばしば「一定の言いおさめ」によって明示される）。



これにたいして「が」は、つねに直接的、内部的に作用する。「が」は、いわば内側からただちに後続部をつらぬき、牽引し、ダイレクトに統括する。

いっぽうは「外側からまわりこんで」かかる。他方は「内側からただちに」かかる。このちがいが、「は」を用いたおおまかな構文と「が」を用いた緊密な構文との、形態的な相違をもたらすのである。

おわりに

つぎにあげるのは、尾上圭介氏もあるところ[7]で引いていた、春日八郎の「赤いランプの終列車」の一節である。

ベルが鳴る　ベルが鳴る
さらばと告げて手を振る君は
赤いランプの終列車

（大倉芳郎・作詞）

ここには「は」と「が」の本質のちがいが、きわめて鮮明にあらわれている（筆者の解釈によれば、であるが）。

ベルが鳴る　ベルが鳴る
さらばと告げて手を振る君　ハ
赤いランプの終列車

「ベルが鳴る」は、「ベル」と「鳴る」とを「が」が緊密に結びつけて一体となしている。しかもこの「ベル」は、いままさに鳴りつつあるところのそれである。ベルというものがあって、それが鳴る――というのではなく、鳴ることによってベルが出現するのである。それでこそ、この詞句の反復が緊迫した臨場感を生ぜしめるのである。

「さらばと告げて手を振る君は／赤いランプの終列車」。この二行は、たがいにまったく別個の叙述という様相を呈している。しかもなおかつ、二行は「は」によって統括されて一文をなすのである。先行部と後続部を独立した項と

して分立する「は」の特性が、この二行の不即不離の文体形成に典型的に生かされているといえよう。「さらば と告げて手を振る君」と「赤いランプの終列車」とは、格関係はいうにおよばず、通常の論理的関係さえも、もちえない。両者はただ、まるごと対置され、関連づけられるだけである。そうであってこそ、この二行は、表現としてそれぞれに独立しつつ、イメージにおいてたがいにひびきあい、オーバーラップしあうのである。

「は」は事物を一般化して相対的に提示し、それに何らかのかかわりのある叙述を後続部に要求する。「が」は、事物を特殊化して絶対的にとりあげ、それに絶対的にかかわる叙述を後続部に要求する。「は」は相対化し、「が」は絶対化する。

本稿は、助詞「は」と「が」の機能の本質がそれぞれ相対化と絶対化にあるとみる観点から、これらの助詞を用いた表現の諸相を検討してみた。諸相といっても、本稿で検討しえたのはその主要なもののみである。しかし「は」と「が」のさまざまな使い分けは、そのすべてが相対化と絶対化という本質から説明しうるように思われる。

説明しうるということは、本質的な原理が把握されたということを示すものであろう。ただし、原理そのものが、使い分けの実践的な公式として、ただちに適用しうるというわけではない。原理から公式をみちびきだす仕事が、本稿とはべつに、必要とされるだろう。

本稿は、現代語における助詞「は」と「が」のみを考察の対象とした。この両者を、他の助詞との比較においてとらえなおすこと。また、両者の歴史的な推移を、機能の本質の面から検討しなおすこと。あるいはまた、文の単位でなくて、文章における文の展開において、両者の機能を検討しなおすこと。これらもまた、本稿で果しえなかった、今後の課題である。

注

（1）三上章は、「は」および「が」の「弱声的用法」と「強声的用法」をつぎのように表示している（『日本語の論理』くろしお出版、一九六三年、一九八頁）。

	弱声的	強声的
は	不問対比	
が	単純排他	

（2）仁田義雄『語彙論的統語論』（明治書院、一九八〇年）参照。

（3）久野　暲『日本文法研究』（大修館書店、一九七三年）参照。

（4）「は」の分離および「が」の結合は、かなり古くから指摘されている。――尾上圭介「提題論の遺産」（大修館書店『言語』六巻六号、一九七七年）参照。

（5）増井金典氏は、「は」と「が」の相違点を二十二項目の対照表にまとめている。――「『が』と『は』について――相違点を対照表にまとめる――」（『滋賀大国文』十四号、一九七六年）

（6）田中富夫「助詞(3)」（『講座日本語7・文法Ⅱ』岩波書店、一九七七年、三九〇頁）

（7）尾上圭介「『象は鼻が長い』と『ぼくはウナギだ』」（大修館『言語』十巻二号、一九八一年）